Tea Times

お茶の水女子大学広報誌 ● Tea Times ● July 2004

10

CONTENTS VOL.10

特　集

お茶大生のキャリアとライフコース

お茶大卒業生のライフコースと女性支援 …… ②

学生への就職支援の取り組み …… ②

道を切り開いた先達たち①

日本初の女性博士保井コノ …… ④

機構紹介② ―学術・情報機構― …… ⑤

監事・経営協議会委員（学外）紹介 …… ⑥

●ピア・サポートプログラムについて …… ⑦

●「グローバル文化学」コース紹介 …… ⑦

●社会臨床論コースが新しくなりました …… ⑧

●家庭科教員キャリアコースがスタート …… ⑧

お茶の水フェスティバル盛会に終わる …… ⑨

●お茶の水女子大学　貴重資料紹介 …… ⑩

●宮沢賢治と植物 ―サクラソウとマムシソウ― …… ⑪

●お茶メール学生版届きましたか …… ⑫

●大学の暦 …… ⑫

■編集後記 …… ⑫

特集

お茶大生のキャリアとライフコース

本学には女子大として、社会で活躍できるよう女子学生を育てていくミッションがあります。本学で学んだ学生たちは社会でどのようなライフコースをたどり、キャリアを実現しているのでしょうか？そこから見えてくる課題は何なのでしょうか？「お茶大卒業生のライフコースと女性支援」ではお茶大生のライフコース調査から、本学の具体的課題を考えます。「学生への就職支援の取り組み」はキャリアの出発点ともいえる就職活動について、本学の取り組みを紹介します。本学の卒業生は、女子高等師範学校の時代から、女性が活躍する道を切り開いてきました。「道を切り開いた先達たち」をシリーズでご紹介します。

お茶大卒業生のライフコー

一般に、女性は多様なライフコースを歩むわけですが、そうしたライフコースに対応して、女性はどのような支援を望んでいるのでしょうか。お茶大卒業生調査（2001年実施）からみましょう。お茶大卒業生のライフコースの特徴は、大学院進学が多い、専門技術職、教育・研究職が多い、同じ勤務先で継続して働く割合は他大学に比してわずかに少ないものの、職種は継続していて再就職割合が多く、かつフルタイム就業者が多いことです。

図１は、お茶大卒業生の職業キャリアパターン（45歳までの段階）を示しています。フルタイム継続が４割と多いですが、パート化継続、中断パート等再就業、中断フルタイム再就業、フルタイム復帰継続、複雑型を合わせ４割以上あり、退職、中断中、就業経験無など無職者は２割にすぎません。就業と無職、フルタイムとパートの働き方を柔軟に組み合わせた多様なパターンに特徴があります。

この柔軟な組み合わせは、出産・子育てによるもので、家族キャリアと職業キャリアを組み合わせた家族・職業キャリアでは、既婚・子供有り・継続就業型が３分の１以上で最も多くなっています。再就職情報源として同窓関係がフルタイムで１割以上、パートは２割あったこともこうしたキャリアパターンを支えています。

卒業生は仕事、家庭の他、学習・趣味・地域活動・ボランティアなどの社会活動にもコミットしています。社会活動には、過去も含めると７割弱の人が参加しており、ＰＴＡなどを含む地域活動（５割）やボランティア（２割）の活動経験が高くなっています。特にボランティア活動には関心が高く、将来やりたい人は５割にものぼっています。調査結果から、お茶大卒業生のライフコース、ライフス

学生への就職支援の取り

「お茶の水女子大学の学生は優秀でまじめで社会人としての資質を備えている」と言われています。しかし、昨今の女子学生をとりまく就職事情を考えると、自分をアピールし、厳しい環境に立ち向かう術を身に付けなければなりません。お茶の水女子大学学生課では、学生への就職支援に全力をあげて取り組んでいます。今年度の予定は、

a）就職ガイダンス開催（全10回）
b）企業研究会（7月28日開催：15社の担当者から各ブースで直接話を聞きます）
c）企業説明会
d）キャリアアドバイザーの設置（10月～3月まで）
e）キャリアガイダンスの開催

などです。

さらに、新しい試みとして、お茶の水女子大学学生課・お茶の水学術事業会との共催による講演会とセミナーが実施されます。

7月7日には、河野真理子氏による講演会「就職から考えるこれからのキャリアデザイン® ～21世紀の女性の生き方、働き方～」（第2回就職ガイダンスに含む）が開催されました。河野氏は男女共同参画会議、厚生労働省、文部科学省などの委員を数多く歴任し、女性のキャリアについて多くの発言をなさっています。明

スと女性支援

生活科学部教授　御船 美智子

タイル選択に共通する特徴をキーワードで示せば、多様性、柔軟性、就業継続性、生活全体への積極性・バランスといえましょう。

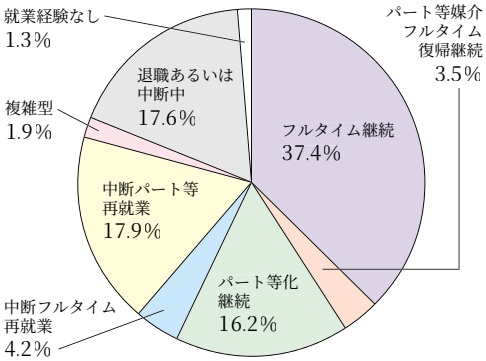
こうしたライフコース、ライフスタイルを選択している卒業生がお茶大の将来像として重視していることは、図２に示すように、「女性の多様なライフコースに柔軟に対応する大学」「男女共同参画社会をリードする人材を養成する大学」です。ライフコースに柔軟に対応する大学とは何か、自由回答からの例では、子育て中の卒業生でも学位（博士）が可能な制度、通信制大学院、結婚・子育てを犠牲にせず働ける・勉強できる環境作り、ライフステージに合わせた再教育・再就職支援、結婚・出産しても社会と関わりをもっていられるようなサポートシステム、人材を生かすための大学と卒業生の太いパイプづくり、卒業生のネットワークづくりの支援などです。

合計特殊出生率1.29に震撼している現代日本社会ですが、重要なことは、こうした女性の具体的ニーズに的確に対応した支援を地道に進めることでしょう。大学として魅力ある・有効な女性支援を、持続的に展開することが求められているのではないでしょうか。（詳しいことについては、お茶の水女子大学『卒業生・修了生のライフコースと国立女子大学の将来像に関する調査結果報告書』平成13年11月を参照して下さい。）※

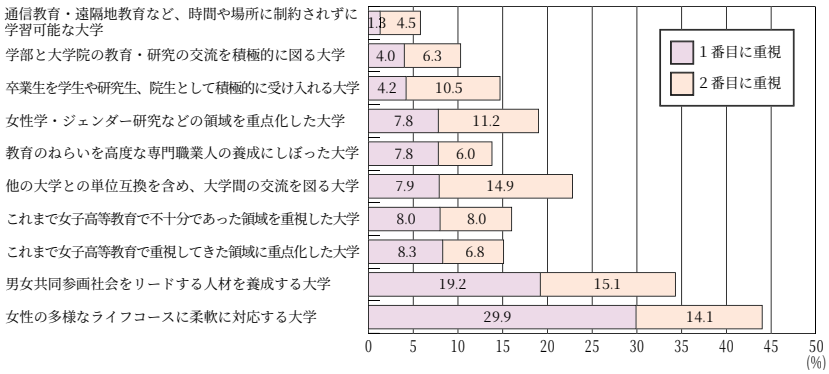
※この報告書は本学ホームページに掲載しています。

http://www.ocha.ac.jp/syuppan/

■図1　職業キャリアパターン



■図2　お茶の水女子大学の将来像　最重要項目と第二重視項目



組み

お茶の水学術事業会　岩城 聡美

るく就職活動をのりきる秘訣とキャリアデザイン® についてお話を伺いました。

続いて、7月31日（土）13時～17時にセミナーを行ないます。これは、河野氏の考案した「キャリアノート」に記入しながら、「今の自分」、「働く目的」、「就職」、「将来の自分」などについて、講師とともに考えながら、ディスカッションを交えて自分だけのキャリアバイブルを作成します。このノートは学生にとって、自分を知り、自分のこれからを考え、自分流の生き方を見つける上で、一生の友となるに違いありません。受講料3,000円のうち、1,000円をお茶の水学術事業会が「学生への支援事業」として負担します。（要予約）

お茶の水学術事業会連絡先：本学理学部3号館204号室

E-mail:info@npo-ochanomizu.org

電話03-5976-1478

6月9日開催の、お茶の水女子大学学生課主催「第1回就職ガイダンス」。就職に関する意識は高く、240人が参加し大盛況でした。アンケート結果は、よりよい就職支援を目指し、次回へ反映させます。

昨年9月に行った、お茶の水学術事業会主催の「就職セミナー」。第1部は5人の内定者から、就職活動の実際を聞きました。様々な分野の話が聞けたと、好評でした。

続く第2部は、懇親会形式で7人の内定者をそれぞれ囲んで、話を聞きました。直接質問をすることができ、本音が聞けたと、こちらも好評でした。

道を切り開いた
先達たち
1

日本初の女性博士保井コノ

ジェンダー研究センター　研究協力員
三木　壽子

保井コノは1880年香川県大内郡三本松村で生まれた。1898年女子高等師範学校（現お茶の水女子大学、略して東京女高師）に新設された理科に進学。卒業後、コノは岐阜県立高等女学校の理科の教員として赴任。3年間の教師生活を終えると、かねてから興味を持っていた実験心理学の研究準備のために生物学を学ぼうと考え、1905年母校に研究科が新設されると、定員1名の理科に入学、岩川友太郎教授の指導を受けた。コノは翌年には最初の論文“鯉のウェーベル氏器官について”を動物学雑誌に発表している。これはわが国女性科学者初の科学論文である。岩川はコノにヒルの卵の発生の研究を進めたが、動物を扱うのが嫌で、同じ発生学を植物のさんせいうもを用いて試み、1911年“さんせいうもの生活史”という題でイギリスの植物学雑誌Annals of Botanyに発表。日本女性が外国雑誌に発表した最初の科学論文である。東京大學農学部の三宅教授は保井の留学先として、ドイツのストラスブルガー教授を推薦した。彼は保井を研究室に招くため机まで用意してくれ、女高師側も後押ししたが、政府からは留学の許可は下りなかった。文部省側に科学の分野で女子を留学させても大成しないのではないかという考えがあったのである。保井の留学が頓挫したままなのを知った藤井健次郎氏の後押しにより、やっと留学の許可が下りたのは、1914年のこと。しかしながら、これには結婚しないで生涯研究を続けるという暗黙の制約があり、留学の条件に理科研究の他に家事研究の言葉が付け加えられていた。そしてこの時には、ストラスブルガー教授はすでに他界し、しかも第一次大戦が勃発、渡欧は断念せざるを得ない状況であった。そのためアメリカのシカゴ大学のチェンバレン、コースター両博士の下に行き細胞学の研究を開始した。続いて石炭の新研究を始めたハーバード大學のジェフレー教授のもとに移る。ジェフレーは世界の石炭の中で日本と満州は残しておくから、帰国しても研究するようにと勧めてくれた。これが保井の学位論文となるのである。

1916年帰国した保井は東京大學の藤井健次郎の指導を受けることになる。勤務先である東京女高師には保井の研究に必要な機器や薬品を購入する研究費がつかなかったためである。保井は早速ジェフレー教授の言葉に従い、愛知、岐阜地区の石炭を調べ、形成する化石植物がセコイアに酷似していることを発見。更に、セコイアが松に似た先祖に由来するという従来の仮説を確認している。そして、日本各地の石炭を採集するため、東奔西走。採集の時、保井は自ら“もっこ”に乗って地下の坑道まで降りて行き、坑夫に直接あれが欲しいこれが欲しいと頼んだ。坑夫もこんな所にまで女性が降りて来たと驚き、とても親切にしてくれたという。1923年、関東大震災があったが、その中で石炭の研究は“日本産石炭の植物学的研究”としてまとめられ東京帝国大學より理学博士が授与された（1927）。このとき保井は46歳、女性博士第一号となった。

1918年東京帝国大學理学部植物学科に遺伝学講座が創設され、藤井が担当教授となり、保井は1917年より1939年まで東大植物学教室の嘱託となって実験を担当した。1929年、藤井を主幹として世界的に権威のある細胞学の雑誌“キトロギア”が創刊された。女高師と東大での授業、さらに自分の研究に明け暮れる日々の中で、保井は藤井や篠遠喜人、和田文吾、田中信徳らを助けて病に倒れるまで、編集、印刷、庶務会計に携わり、毎年のように自分も論文を掲載していた。石炭研究のあと、保井は遺伝学、細胞学を研究し、広島に原爆が投下された時はすぐに被爆したムラサキツユクサを採集し、放射性物質が植物に与える影響について報告している。

1949年新しい学制が敷かれることになり、保井は東京女高師を女子の国立大学として存続させる為に、あちらこちらに陳情に出向き、猛運動を展開した。また、保井はいろいろな研究会や講演会によく出席した。“よく出席されますね”といわれると、新しいことを学びたいからと答えている。1955年紫綬褒章、1965年勲三等宝冠章を授与され、従三位に叙せられた。

写真提供：ジェンダー研究センター

機構紹介②

── 学術・情報機構 ──

前号に引き続き、本学の運営を担う機構を紹介いたします。今回は、女性支援室、社会連携・広報推進室、情報推進室から構成される学術・情報機構です。それぞれの室長に紹介していただきます。

女性支援室

『元気印が合言葉』

女性支援室長　河野 貴代美

女子大に学生支援室がありさらに女性支援室を設置するのは何か理由があるのだろうか？と思われるでしょう。はい、あるのです。

前者が学内の学生のみを対象とすれば、私達は、卒業生や職員をも含み、一般的に、女性たちの就労支援を射程に入れています。このような方針のもと、まず（財）「女性と仕事の未来館」（以下「未来館」）との連携を考えました。意図を了解してくださった相談事業統括の職員の方が、常時「室会議」に参加くださっております。

室はこれまですでに学内における教職員の男女差を調査しております。いずれ何かの媒体手段を通して、報告するつもりです。さらに大学の「中期目標・計画」に照らして、どのような企画立案をしていけばいいか、アンケート調査を行ないました。これも機会をみて報告いたします。

今年、室の最大イベントは、徽音祭に学生、「未来館」との共同主催で、「人生プランと仕事（仮題）」といったようなシンポジュウムを企画することになりました。学生側も大いに乗り気になってくれています。シンポのテーマは今後、詰めていかなければなりません。学長や「未来館」の館長、学生等のシンポジストを予定しています。

今後はキャリア・アップの個別相談室の設置、他の女子大学との連携（コンソーシアムのようなもの）そして最終的には女子大の存続を可能ならしめる女子教育の必要性に向けた理論の構築です。元気印たる所以でしょう？

社会連携・広報推進室

『オシャレコウスイ！』

社会連携・広報推進室長　篠塚 英子

われわれの組織名は漢字が全部で八文字もあり、やたら長いので覚えるのが難しい。そこでお茶の水、社会、連携、広報、推進のトップ五文字を繋ぐとオシャレコウスイ。これはゴロがよいとひそかに気に入っております。そこでわが室からはオシャレな企画をご報告します。

表紙が一段と華やいだ本誌Tea Timesは柴坂編集長によるもので、現在キャンパス内に群生する草花がトップを飾っています。お茶メール教職員版と学生版は、山本学術情報機構長と菅先生の名コンビ。もっと大規模なホームページ担当は大瀧先生。さらに目下顕著にメディアに登場しているのが、北区や文京区との地域社会との連携で、これを一手に引き受けている千葉先生。特に北区との連携は、多様な人材を抱える本学にとって教育、研究両面で他大学との差別化をするチャンスにしたいものです。

また種々雑多の大学案内など広報誌のリニューアルは予算との戦いですが、こちらは宮尾先生が格闘しております。最後に西村企画広報課長は、これら教員と事務職員の間をコーディネイトする重要な役割です。

さらに卒業生、近隣住民の方との交流などはNPOお茶の水学術事業会と共催したさまざまな企画・実行を試みており、さっそく大学・附属学校園の広報にとって役立つ「お茶大ゴーフル」【600円】というオシャレな商品開発の発売にこぎつけました（申し込み info@npo-ochanomizu.org）

目下の緊急課題は学内でバラバラに発信していた広報活動を、本室で集中管理するシステムを構築することです。

情報推進室

『情報推進室紹介』

情報推進室長　會川 義寛

情報推進室は、総合情報処理センターと密接に協力しつつ、目下以下の3点に対処しております。

ひとつは、学内情報基盤（インフラ）の構築と整備です。基盤を意識することなく安心して依拠・使用して頂ける様に管理することが基本です。また、学生や教職員に対する情報周知システムの整備も急務です。掲示板方式（パソコン・携帯端末から学生・教職員側が見に行く）とラジオ方式（学生・教職員のパソコン・携帯端末に大学側から送付する）の両者をスムースに機能させる様検討しています。

次は、各部局が有する情報資産を相互整備して、大学として整合性のある情報システムを構築することです。最初に情報作製の段階がありますが、これは各部局で行なうものです。つぎにその分類と階層化を行なわなければなりませんが、これが、各部局ごとに作製・保管している情報資産の多方面多目的合理的利用化と適切な安全管理の基礎になります。このため、やや遅きに失しておりますが、現在、各部局の情報システムおよびその管理体制の現状把握調査を行なっております。関係の皆様には御協力よろしくお願い致します。またこれと併行して、大学としての情報安全管理指針（セキュリティポリシー）の作製を行なっております。これも他大学に大きく遅れております。急ぎ検討中です。

3つ目は、情報に関する教育と啓蒙です。学生に対してはコア科目における情報基礎教育（科目・施設・教材）を通じてこれを一律一斉に行ないます。しかし教職員に対してはその様な場がありませんので、啓蒙マニュアルの作製などを通じて、公開性・利便性と安全性とが調和した大学の情報システムに思いを馳せて頂く一助にしたいと考えております。

監事・経営協議会委員（学外）紹介

4月1日よりお茶の水女子大学は国立大学法人お茶の水女子大学へと生まれ変わり、学長・理事で構成される役員会の他に、監事2名と経営協議会がおかれました。

本学の業務の監査をする監事と経営に関する事項を審議する経営協議会の学外委員をご紹介します。

【監　事】

- 古河電気工業株式会社顧問　桐村　晋次
- 山田法律特許事務所所長　山田　勝重

【経営協議会委員（学外）】

- 凸版印刷株式会社代表取締役社長　足立　直樹
- 元青山学院女子短期大学学長　阿部　幸子
- 株式会社資生堂代表取締役社長　池田　守男
- 日立金属株式会社取締役　一橋大学客員教授　生駒　俊明
- UBS銀行グループ日本代表兼副会長　江澤　雄一
- 読売新聞東京本社調査研究本部主任研究員　北村　節子
- 学校法人早稲田大学副総長・常任理事　關　昭太郎

ピア・サポート・プログラムについて

新入生サポート

コーディネーター　宮尾 正樹（文教育学部）

ピア・サポート・プログラムは、新入生の大学生活への適応を支援する制度で、2003年度より文教育学部で実施されています。ボランティアの上級生がサポーターとなって、数人の新入生とピア・サポート・グループを作り、時間割の組み方、学内施設の利用の仕方などのアドバイスをし、相談に乗ります。各グループにはアドバイザーの教員がつきます。大抵は、週一回程度、昼食を一緒にとりながらの活動です。昨年、今年とも、新入生のおよそ八割が参加し、２年生から院生まで約30人がサポーターになってくれました。プログラム主催のコンパや講演会（今年は秋に予定）も行っています。

本プログラムの新入生にとってのメリットは、第一に、長期間にわたって、必要な時に、身近な上級生から理解可能な形で情報を得ることができることです。また、サポーターや他の新入生との交流により、お茶大の空気に早く慣れることができます。

サポーターも、新入生の適応を支援することで、広い意味での大学の運営に参加した充実感が得られ、アドバイザーの教員や他のサポーターとの交流により、自分自身の大学生活の空間を広げることができます。

来年は最初にサポートを受けた学生が三年生になります。自分がサポートを受けた経験を、ぜひサポーターとして活かしてほしいと思います。

「グローバル文化学」コース紹介

カリキュラム

文教育学部助教授　熊谷 圭知

グローバル文化学は、今年から新たに創られた「コア・クラスター」（学際的なテーマを追究するお茶大独自の教養教育の授業群）の一つです。「グローバル文化学」（総論・必修）のほか、「イスラムの社会と文化」「比較法文化論」「国際協力学」「共生日本語入門」「異文化交流実習」…等々、新鮮な響きの科目が並びます。このコースがめざすのは、グローバル化する世界における新しい「文化」のあり方を考えることです。

１）グローバル化の中で、地域の（ローカルな）文化はどう変わるか？

２）異なる文化をもつ人々とコミュニケーションするには？

３）異文化を理解し、真の国際協力を実践するには？

現代世界を生きる私たちが避けて通れないこうした問いを、ひとりひとりが自らの頭で考え、答えを探していくコースです。英語での講義、ディベートを取り入れた参加型の授業、異文化交流の実習など、新しい手法の授業も数多く盛り込まれています。

参加者は、全学部にまたがり、総論の受講者だけで150名を超えています。アンケートでは、受講動機として、海外の社会や文化に興味があるという人が4分の3、異文化間のコミュニケーションや、国際協力に関心があるという答も半数近くありました。将来、できれば海外に関わる仕事がしたいという希望をもつ学生が85％を超えています。「お茶大にもようやくこういうコースができた！」と喜ぶ声。これまでのお茶大には少なかった、開かれた知性と感性を備えた、アクティブな学生たちが確実に育ちはじめているようです。

社会臨床論コースが新しくなりました

社会人リカレント

社会臨床論コース主任　酒井　朗

社会臨床論コースは、大学院前期課程発達社会科学専攻に1997年度に開設されました。教育、保育・子育て、心理、保健、福祉などの種々のヒューマン・サービスに携わる社会人、及び将来そうした活動に積極的に携わろうとする方々を対象に、各自の実践を振り返り、専門的力量を向上させるためのカリキュラムを提供しています。

本コースではより多くの社会人が学べるように、今年度から次のような改革を実施しました。①夜間授業の本格開講、②社会人特別選抜試験から外国語を廃止、③修士論文を他科目で代替可能に、④長期履修学生制度の導入（同制度は大学院前期課程全体に適用）。

昨年８月末と２月の入試を経て、本年４月には16名の方々を新たに迎えることができました。新１年生には、幼稚園・小学校・高校・専門学校の教師、助産師、リハビリセンター職員、社員研修アドバイザー、法学研究者、雑誌編集者、心理療法家、会社員、民間非営利団体職員、主婦など多彩な経歴・年齢の方が集まり、昼間も夜間も大いに盛り上がっています。本コースのホームページを是非一度ご覧下さい。

URL：http://www.hss.ocha.ac.jp/zenki/sharin/index.htm

家庭科教員キャリアコースがスタート

キャリアサポート

生活科学部長　戒能 民江

本年4月、生活科学部の「家庭科教員キャリアコース」が発足しました。生活科学部では、中学・高校の「家庭科」の免許が取れますが（幼小免許も取得可能）、本コースの設置によって、学生のキャリア計画を学部として支援する体制を整えました。

「結婚・出産しても働き続けられる労働環境が魅力的だった」と語るのは、高校教員を経て現在大学助教授のＡさん。また、企業をいったん退職した後、非常勤講師として教壇に立ったＢさんは、「家庭科の奥深さを改めて感じる」と充実した毎日をふりかえります。２人の本学卒業生はそれぞれ違ったライフコースを歩んできましたが、家庭科教員免許を取得していたことで、自分の途を積極的に切り拓くことが出来たのです。家庭科教員になるだけにとどまらず、さらにステップアップすることで、多様なキャリアにつながります。

それに、家庭科は「今」を切り取る魅力的な教科です。食の安全、環境やエネルギー問題、ジェンダーや家族問題、消費生活など、子どもたちは目を輝かせて学んでいます。

家庭科教員キャリアコースでは、履修指導や先輩を講師に迎えたセミナー、教員と学生の懇談会、資料・図書コーナーの設置など、教員採用試験の支援とともに、広い視点からキャリアサポートを行っていきます。今後、生活科学部では、さまざまな資格取得の支援に取り組み、学生のキャリアプランづくりの応援に力を入れていく予定です。

第2回 お茶の水フェスティバル盛会に終わる

文教育学部教授　篠塚　英子

雨上がる

6月12日(土)13時から第2回お茶の水フェティバルが開催されました。梅雨時の行事のため去年は台風に泣かされたのですが、今回は無事でした。フェスティバルには3つの企画があり、午前の部はお茶の水学術事業会の総会、午後はアカデミア21のシンポジュウム、終了後はホームカミングパーティを兼ねた懇親会です。

山本副学長をフェスティバル実行委員長として、教員による準備会を昼休みに数回もち、学生ボランティアの力もかりて、お祭り当日は雨上がりの清清しい朝となりました。

ごった返す受付

第1部、読売新聞社と共催の「読売･お茶大アカデミア21」は今年からスタートしたビッグ・イベントで、今後数年この読売との共催予定です。外部の著名な講師講演と、本学の多彩な教員を投入して展開されて討論内容は後日、読売新聞紙上にも掲載されました。(平成16年7月2日朝刊)

会場となった大学講堂、徽音堂（きいんどう）を正面に、受付は右手が読売新聞社への申し込み、左手がお茶大・事業会経由への申し込み、と分かれました。受付近くには大学貴重資料の展示やアフガン女性教育支援のパネル展示もあり、休憩時間の聴衆を期待しておりました（実際はトイレ･タイムに時間が予想外にかかり、次回に向けた反省点です)。会場受付開始のかなり前に入場者が現れ始め、受付は徐々にごった返し、応対の学生ボランティや教員は蒸し暑い中汗だくでした。

若い女性の結婚の条件

13時開始前、どこからともなくはかなげな楽器の奏でる音が流れてきます。お茶大附属高校生がチャリティコンサートとして特別参加したもので、アフガン女子教育支援募金に一役かっておりました。

開始に先立ち読売新聞社調査本部次長谷口氏と、本田学長による挨拶の後、直ちに本題の「現在女性の恋愛･結婚･就労パズル」の基調講演が、評論家小倉千加子氏により約1時間。サービス精神一杯の小倉さんによる現代女性の結婚の条件に、会場は笑いの渦。しかしそれでどうなる？という心配をパズルに残して放り出された感じもしました。

休憩15分後に、北村節子氏【読売新聞】の司会で、本学から菅聡子氏【国文学】、竹村和子氏【英文学】、篠塚英子【経済学】が、それぞれ専門の分野から議論を展開しました。詳細はお茶の水学術事業会のブックレットにまとめる予定です。

懐かしい顔ぶれの懇親会

懇親会は改築された生活科学部3階大講義室で開催され、ボランティアも含め170人が参加、会費1000円とは思えない豪華なメニューを楽しみました。今回のメニュー担当は生活科学部の久保田先生を中心に腕をふるって下さいました。なおフェスティバルの参加者は読売側が280人、お茶大側が220人合計500人の外、事務局が30人加わり、総計530人でした。

討論会

講演をする小倉氏

2

お茶の水女子大学

貴重資料紹介

武村耕靄筆「百合図」

文教育学部教授　**秋山　光文**

6月12日に挙行された「お茶の水フェスティバル」の会期に合わせ、「お茶大所蔵貴重資料展示会」が生活科学部会議室で開催された。これは、大学資料委員会がこれまで続けてきた学内調査で明らかにされた絵画作品をはじめとする貴重資料と、それに伴う修復事業の成果を公開するもので、そのなかには本作品のように1世紀近くほとんど紹介される機会を持たなかったものも含まれている。今回展示された絵画作品は全部で8点で、そのうち3点は武村耕靄の筆になる。

本作品は、大学資料委員会の進めていた学内資料調査の際に、徽音堂脇の倉庫から発見した大層痛んだ状態の小屏風であった。画面右下に記された「耕靄女史」という落款から、作者が武村耕靄であることはすぐに判明したが、作品全体に及んだ退色と下地の絹の劣化は経年変化の域を超えており、直ちに補修と保存作業が求められた。修復専門家により、下地から慎重に絵画部分だけをはぎ取った後に、全体に洗浄を施し、改めて裏打ちを行い、最後に額装としたものが今回展示されたのである。

本図は、画面右側に大きく描かれた百合を中心として、オダマキやアゲハ蝶など夏の情景が構図の右下側を占めている。一方、画面左にはススキやワレモコウなど秋草が一群としてやや小さく表され、遠近法を用いながら構図全体に奥行きを感じさせる試みがなされている。

武村耕靄（本名千佐）は、東京女子高等師範学校の創設当初から絵画担当の教授として就任した女性画家で、嘉永五（1852）年11月25日仙台藩士の娘として江戸芝口に生まれている。山本琴水・春木南溟について文晁派の南画を習得するかたわらで、川上冬崖の画塾である聴香読画館に入門し、洋画も学んでいる。

こうした耕靄の画歴を物語るように、本図の百合の表現には明らかに西洋画からの技法的影響が看取され、また遠近法を用いた構図も伝統的手法から脱却した近代日本画の息吹が感じられる。その一方で、秋草の描き方には伝統的な筆遣いも認められ、本図の制作目的は明らかではないものの、鑑賞画というよりもむしろ学生たちにさまざまな技法を教授するために描いた、絵手本としての性格を帯びていたと推察される。花鳥画を得意としたといわれる作者の多彩な技法が看取できる作品である。制作年代は不明だが、明治20～30年頃ではないだろうか。

（大学資料委員会委員）

サクラソウ

◆宮沢賢治と植物◆

―サクラソウとマムシソウ―

マムシソウ

文教育学部教授　**大塚　常樹**

文学の中には、私たちがふだん考えつかないような発想が見いだされて新鮮に感じることがありますね。花壇設計師でもあった宮沢賢治は植物の性質を熟知していましたから、賢治作品の中には、植物をめぐる新鮮な発想がたくさん見られます。

最初はサクラソウです。サクラソウは桜の名前をもつように、濃い桜色の花をしています。桜はご存じのように、平安時代から盛んに和歌に歌われ、日本文化の象徴とも言える花ですね。江戸時代には「敷島の大和心を人問はば朝日ににほふ山桜花」（本居宣長）と、大和魂の象徴にまでなりました。しかし、賢治はもちろん、新しい価値観や美意識を求めた萩原朔太郎、梶井基次郎、室生犀星などの近代の文学者たちはこぞって桜を性的な花とみなしました。よく考えれば花は生殖器であり、それが発想の転換の前提でしたが、桜が血祭に上げられたのは、伝統文化の象徴だったことに加えて、性的な色であるピンク（桃）色の花だからです。賢治の童話「若い木霊」をみてみましょう。寒天のように水気を帯びた春の大気の中で、若い木霊（こだま）は、土中から出てきた蕾、かたくりの花の怪しい文様、やどりぎの実など、春の自然からさまざまな刺激を受けます。性欲は「鵯の火」「もゝいろの火」で示されますが、サクラソウがつぶやく「空はすっかり鵯の火になった」というひとり言を聞いたとたん、木霊の胸は「裂けるばかりに高く鳴り」だし、吐く息は「鍛冶場のふいご」のように熱くなります。つまり木霊の胸の中は「鵯の火」で一杯になったのです。鵯（とき）色は桃花鳥という別名をもつ鵯の羽色から来た名前ですから、サクラソウも含めて、春は《ピンク（桃）色》の誘惑に満ちているというわけです。

もう一つはマムシソウです。「国立公園候補地に関する意見」という詩のなかで賢治は、噴煙立ち上る岩手火山（現在は八幡平国立公園に指定）周辺を地獄ワールドに仕立てて、地獄交響曲やら、えんま庁、胎内くぐり、三途の川などを作って、世界中の悪い奴らを集めてこらしめたい、という愉快なプランを提示しています。その中で実に効果的なのが、地獄ワールドの花壇です。そこには猛毒の朝鮮朝顔とトリカブト、それに加えて写真のマムシソウが植えられています。マムシソウは毒草ではありませんが、毒蛇のマムシに似ていますから、極悪人たちも震え上がって、改心すること間違いなしですね。

お茶メール学生版届きましたか

学術・情報機構長　**山本　秀行**

2004年5月26日は何の日かご存知ですか。開学記念日ではありません*。お茶の水女子大学メールマガジン、略してお茶メールの学生版が創刊された日です。この日にこだわったのは、編集長の菅聡子大学院人間文化研究科助教授です。理由を聞くと、「大安だから」とのことでした。お茶大の卒業生には、案外、古風なところがあります。そういえば「お茶目なメール」と命名したのも、卒業生である本田学長です。

学生版の目玉は、教職員からの伝言板「Yahhoo!!」ヤッホーと、学生のみなさまからのメッセージを載せる「反響板」です。まるでピンポンみたいですが、編集長には逆らえません。それと第二のツチヤ教授を世に送りだすべく、先生方にリレー・エッセイを頼んでみました。ご期待ください。

このお茶メールを受信するには、総合情報処理センターのアカウントが必用です。私には届いていないという方や、お友達でまだお茶メールを知らない人がいたら、ぜひセンターまでお越しください。無料でアカウントをさしあげます。
このアカウントがあるとたいへん便利です。アクティヴ・メールが使えて、出先でも家のパソコンでも、メールが読めて、返事ができるからです。もちろん簡単な設定で、自分の携帯電話に転送することもできます。わからなければ、センターか研究室に聞いてみてください。

これからは大学からみなさまへの連絡に、このアクティヴ・メールと大学のホームページが重要な役割をはたすことになると思います。ホームページももっと魅力的なものにリニューアルいたします。いいアイディアやデザインがあれば、ぜひこのTea Times編集局までお寄せください。お待ちしています。

*開学記念日は5月31日です。ちなみに創立記念日は11月29日で、本学には二つの記念日があります。開学記念日は新制お茶の水女子大学の開学を記念するもので、創立記念日は旧制女子高等師範以来のものです。

大学の暦

（平成16年8月～平成16年11月）8月1日～9月23日

● 8月　1日～9月23日	夏期休業
●10月　1日	後学期授業開始
●11月13日～14日	徽音祭
●11月29日	創立記念日

［表紙の写真］左から、いわかがみ、おおかめのき、にっこうきすげ。
［撮影場所］志賀高原体育運動場
［写真提供］佐竹 元吉　生活環境研究センター教授
※撮影場所の志賀高原体育運動場（通称：山小屋）は、体育実習、附属学校の林間学校、また、ゼミ合宿などにも使用されています。本学及び附属学校園の学生・教職員等がいつでも利用できます。お風呂は発哺温泉から引いた天然温泉です。
問い合わせ先：会計課資産管理係（03-5978-5125）
http://www.ocha.ac.jp/gakuseibu/yagaisisetu/index.html

編集後記

本学の前身、女子高等師範学校は、かつて女性が高等教育を受けることのできる数少ない場所でした。今では女性が大学に進学し、就職するのは当たり前のことですが、その頃の先輩方が道を切り開き、社会的にも活躍されてきたからこそであろうと思います。

学生たちが卒業後十分能力を発揮し、社会に力を還元できるように、大学としてこれからも様々なサポートを工夫し、取り組んでいきます。

（編集長　柴坂）

■お茶の水女子大学広報誌

Tea Times 10号

平成16年7月14日発行

■編集発行
お茶の水女子大学　社会連携・広報推進室
本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは、お茶の水女子大学企画広報課にお寄せください。

■編集委員
編集長　柴坂　寿子（社会連携・広報推進室）
編集事務　髙橋苗々子（企画広報課）

■問い合わせ先
お茶の水女子大学企画広報課
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL 03-5978-5105
FAX 03-5978-5890
E-mail　info@cc.ocha.ac.jp
URL　http://www.ocha.ac.jp

■Tea Timesは本学ホームページでもご覧になれます。
http://www.ocha.ac.jp/syuppan/

製作・印刷／三鈴印刷